

國土

藏内, 數太

<https://doi.org/10.15017/2545022>

出版情報 : 哲學年報. 2, pp.325-344, 1941-03-31. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

國

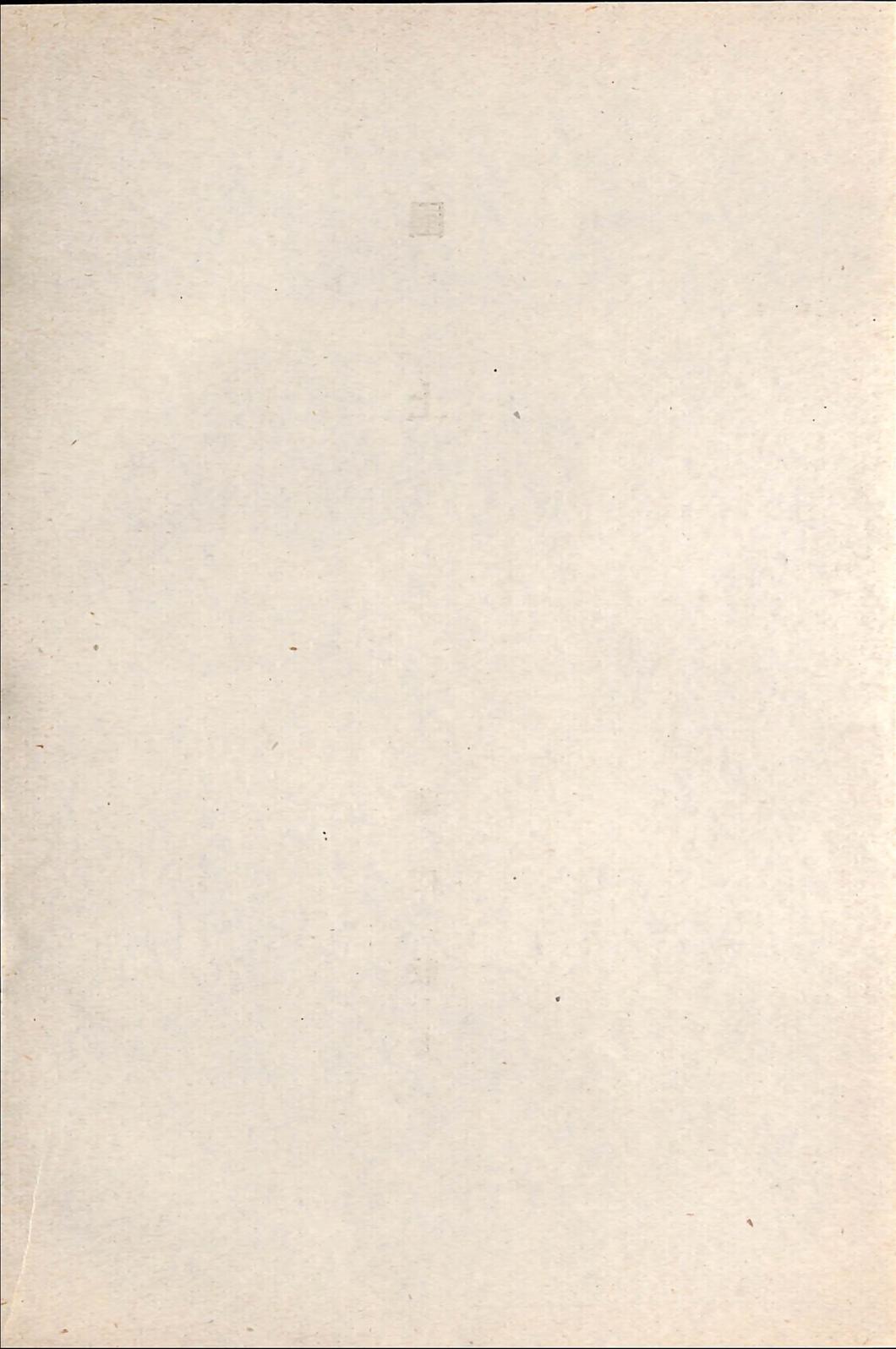
土

藏

內

數

太



目 次

- 一、日本の國民統一の契機としての國土體驗
- 二、國と土の合一と文化
- 三、國土と國民の關係に於ける現實的推移

一

此處で國土を問題としようと思ふのは、例へば、近時云はれてゐる、「國土計劃」などに於ける國土とは、異つた意味に於てある。

國土計劃は、國家の總力を強化する爲に、政治的、經濟的、文化的施設の立地計劃を綜合的・合目的々になさんとすることであるとされて居り、國土を外的存在の意味に於て考へてゐるものである。しかしかゝる見地は、それのみでは、恰も、人間を單に人的資源として外的にのみ考ふることが、結局この資源を意味づける根本的價値態としての人間を閑却する危険をもつ如く、總力の發揮によつて無窮の發展をなすべき國民統一の意味の高揚に不調和であると思ふ。さて社會學にとつて問題は、第一次には、社會の統一そのことであり、即ち體驗の世界に屬する事柄であるから、今客觀的事實としての國土が、體驗の世界に如何に自己を投影し、如何に國民社會の統一に聯關してゐるか、特に日本の國土が、如何に日本の國民統一の契機となつてゐるか、と云ふことを、問題としようと思ふのである。

從來、客觀的存在としての土地が理論社會學上問題となつたのは、主として次の二面に於てであつた。その第一は

原因態としての土地、即ち社會の規定因子としての、社會の環境としての、土地の意義である。これについては今特に説明を要しない。その第二は、場所と云ふ性格に於ける土地の意義である。土地は、その上に人間が居住、團結してゐる場所であり、人間の社會的結合の基礎たる接觸の地盤であり、多數の人々を内に包む一種の全體者である。そこで、人と人との接觸と習熟に基づく人間結合の問題に關係して、理論社會學上、土地が問題とせられたのである。今、客觀的存在としてのみならず、體驗に對し、土地は如何に關係するであらうか。社會的結合性の内的契機として、土地は如何なる意義を有するであらうか。この、社會の意味に從つての土地の考察を、國土に就いて問題としようと思ふのである。

國土に相關的な集團は國家であることは云ふまでもないが、集團には、その成立に二つの要件がある。第一は人々の間の心的融合、即ち多數の人々が一個の吾として自らを感ずること、所謂吾等意識なるものの存在であり、第二は多數の人々のなせる全體が、個々の成員の心に對して威壓的または規制的存在として臨んでゐることである。テオドル・ガイゲルは前者を「ゲマインシャフト」、後者を「ゲゼルシャフト」と呼んでゐるが、私は前者を「同」、後者を「制」と名づけてゐる。^(註二)要するに集團とは、吾の他人に對する結合の體驗と、全體なるものへの意識とに基礎づけられてゐる所のものに外ならない。今國民集團に於ける國土の意義を見るに當つても、これを謂はゞ同と制の概念に從つて、即ち國土に對する吾々の内的結合と、國土に於ける全體性の體驗に就いて、考察しなければならぬと思ふ。換言すれば、國土に對する人々の愛と、國民社會といふ全體の象徴としての國土の體驗との二箇の事柄が、考察されなければならないと思ふ。

日本の國土に就いて吾々の直ちに注意せしめられることは、先づ地人の結合の獨特性である。固より如何なる所に

於ても、人間の定住長きにわたれば、人の地に對する愛着（人より一方的ではあるが）の生ずることは云ふまでもないが、このことは日本に於ては特に顯著なのである。それは種々の理由よりして考へ得る。第一に國土の特殊な美に基づく自然愛が考へられる。この國土の美は、單にその空間性に於ける美として云ひ得るにとどまらず、時間的推移の體験による深化を伴つてゐる。即ち國土の美は四季の推移に於て特殊の奥行を得てゐるのである。更に日本の國土の美は、單なる視覺的快適にとどまらず、極端の寒熱をもたない爲の身體的快適をも意味してゐる。かかる國土の美が必然的に國土愛を基礎づけることは言を俟たない。第二に農本生活に基づく諸事情が指摘される。日本は、其の永い歴史を通じて、農業生活を基本として來た。農業に於ては土地は價値の反復的生産者である。謂はゞ實は田からであり、土地は價値の根元態である。農はまた人を土地に定着せしめる。そしてこのことは、土地と人との心的結合の基礎となる。更に、定着は多く世代を超えて成立する。従つて吾が土地はまた祖先の土地であり、其處には祖先の記憶が托せられる。かくて祖先崇拜が成立すると共に、また祖先の觀念が土地の體験に混融し、人の土地に對する情的結合が強化される。第三に歴史的關係が指摘される。日本の社會生活の歴史は、最もしばしば論ぜられてゐるやうに、外部の民族によつて深刻に影響されたことが極めて少い。日本は多くの外來の人民を包容したにも拘らず、それが何等固有の人民の移動と流離の原因となり得なかつた。民族はこの土に數千年の平和的居住を享受し、この國土はただ吾々のみのものであり、嘗て如何なる民族の國土であつたこともない。民族と國土とは謂はゞ同胞であり、また永久の契を結んだ夫婦の如き關係にある。

以上の如き事柄が日本に於ける地人の結合の深さを基礎づけてゐる。しかし、かゝることは凡そ如何なる所に於ても原理的に可能なことである。吾々は更に特に東洋的な自然感を顧慮すべきである。東洋的自然感とは、マツ

クス・シューラーの所謂宇宙的一體感である。一體感とは、吾々の^{ツイグレン}生的層に於て、非覺知的に、自動的に成立する所の自他合一の體驗であり、宇宙的一體感とは、禽獸、蟲魚、山川草木と人間との間に根元的差別は存しないと云ふ體驗である。人は元來小宇宙である。従つてかゝる一體感は當然であつて、錯誤ではなく、寧ろ人間の健康なる段階に對應する。小供や女子は男子に比し、未開人は文明人に比して、より多く此能力を保有してゐる。歐羅巴人は就中この能力を失ひ、その爲に生的價值が功利的價值に下屬せしめられ、婦人や小供は「文明」の犧牲となつてゐる。たゞ東洋に於てはそれが保存せられ、思想化されてゐる。これがシューラーの見解である。^(註三)固より東洋的體驗と西洋的體驗の差異に關する一の説き方にすぎないが、しかし、しばしば東洋はその内部に西洋的世界に於ける如き精神の共同を有たないと云はれるにも拘らず、所謂「アジアは一」^(註四)ならしめる所のものとして、物心の根元的對立を知らないと云ふ體驗様式が存し、これが根本に於て物心二元論的エイトスに立つ西洋と對立してゐる事實は、これを否定出來ないと思ふ。従つて東洋的自然感に於ては、人間は「本來」自然と情的結合をなし得る。このことは夙に理論の上にも反映してゐる。例へば韓愈は「原人」に於て、天地の兩間に在る者は夷狄禽獸を含めて一體としての人であるとなして、「一視同仁」を云ひ、王陽明は大學の「明明德」を解して、天地萬物一體の體を立つるの謂であるとし、例へば吾々が草木の摧折を見て心傷むのは、この一體の指標であるといふ意味に説いてゐる。^(註五)その表はれは印度に於て、支那に於て、日本に於て異なるが、人と自然との間に原理的差別を立てないのは、東洋人の共通の傾向と云ふことが出来る。然らば此處に於ては、人と土との連續は原理的に確立されてゐると云ふべきである。従つて前述の如き人と國土との特有の結合も、かやうな原理的事實の背景の下に於て成立してゐるのであると解しなくてはならない。人と人との連續は人性そのものに深く根ざしてゐるが、日本に於ては、この連續が更に右の如き地人の連續により裏づけられ、

この二つの連続が合一してゐると云へるのである。

日本が島國であることは、日本の國土の第二の重要な意味を規定してゐる。島國とは、地の限界が國の限界である所のもの、換言すれば、地の連続の極と人の連続の極とが合一してゐる所のものの謂である。かゝる所に於ては、人の連続は地の連続に於て考へられ、地の連続は人の連続に於て考へられることが必然である。日本の國民統一は實にかゝる地人の兩者に於ける連続の合一に於て確立してゐる。これは單に空間的に、土が人の横の統一を代表してゐると云ふ意味に於てのみならず、また時間的にも考へられるのである。即ち土の統一と人の統一との合一は、例へば民族移動の頻繁な所であるとか、社會的對立や壓制等の苛烈な所であるとか、或は易世革命の國に於ては、夫れ夫れ困難であると云はなければならぬが、日本に於ては、この兩者の統一の結合を妨げる事情が無かつたが故に、地をその永遠性の性格に於ても國に結合して體驗することが可能となつてゐるのである。一言にして云へば、此處に於ては、國は土の如くまとまり、土の如く永遠である。土は眞に國の象徴となつてゐる。このことが日本國土の體驗的意味の第二である。

國土が國民の特有な愛着の對象であること、土が國統一の原像となり、象徴となれること、國土はこの二つの意味に於て内的社會的體驗の世界に屬するのであるが、この特有の國土意識こそが、日本と云ふ國民社會の重要な團結契機である。しばしば日本の社會原理は和であると云はれてゐるが、これは右の意味に於て國土に結びつけて考へ得る。今、和が原理であると云ふことは、反立の事實を否定することでは固よりなく、たゞ反立に對して和が優位を占め、前者は後者に包まれてゐると云ふ意味にすぎない。謂はゞ和は非連続に對する連續の優位である。而して、この意味に於てそれはよく日本社會の性格を代表してゐる。土地は連續性を最もよく代表する。(つちはず、くであるとも

いふ。和の社會、即ち連續の原理に特色をもつ日本の社會は、土地の意味に従へる社會に外ならないと云へる。のみならず、此處に於ては土地の連續に人の連續が托せられてゐるとも云へる。吾國の住居の開放的性格はこれを意味してゐる。この解放的住居は、因果論的には日本の濕潤な風土に結合して考へられなければならないが、構造論的には謂はゞ濕潤な人間關係としての和に對應してゐる。それは人の連續と土地の連續の合一の姿である。屋内と屋外とが連續的である解放的住居に於ては、人の連續は土地の連續に自己を托してゐると云ふ意味が見られる。かゝる性格の住居が、氏神を中心としてあつまり、この聚落そのものが實は一の擴大せられたる自然の家としてアット・ホームの體驗の範圍をなしてゐると云ふのが、理念的に云はれた日本の村の姿であらう。この村はやがて次の、また次の村に連續する。而して日本の社會に於ては、大なる聚落に於ても終に大陸に於けるが如き城壁を成立せしめなかつた。古代の聚落に於ける濠、筑紫の水城や山城、都に於ける城門等、その機能稍々大陸の城壁に近いものもあつたが、大陸社會に於て城壁の占める重大意義は遂に日本にはフレムドである。城壁は連續としての土地の否定態に外ならない。さて、かゝる聚落が連續して土の極に及べる範圍が、日本の國である。集團的感情は土のこの限界に伸び、外部に對してはこれに收縮し、茲に國土と國社會との合一が成立してゐるのである。

11

右の如く日本の國民社會は、就中土地的性格の團結であることを特質としてゐる。このことは民族の歴史の各方面に於てその表現を見出してゐる。古代に於ける國生み神話は、地人の連續を最も端的に表現してゐる。文化の世界に於ては、藝術の領域に於ける顯著な自然主義がそれを代表してゐる。日本藝術に於ける自然主義は二面に於て考へら

れる。第一は描寫の對象に於ける自然主義、即ち自然に對する愛着の傾向である。第二は描寫の方法に於ける自然主義即ち勞作原理アルバインツプリンチプの拒否である。アルバインツプリンチプの拒否は、具體的には象徴主義となつて表はれてゐる。象徴主義は共同社會的傳達形式に外ならない。一の表現が象徴であり得るには、表現者と享受者との間に體驗の共同關係が存せねばならない。また表現者の側に於て、彼の與へた單純な形象に他人が豊富な含蓄を理解して呉れるであらうと云ふ信頼と、受容者の側に於けるかくすることへの好意が無ければならない。この體驗の共同と信頼と好意の前提を充たし得る人間關係はゲマインシャフトである。従つて國土に裏づけられた和の社會としての日本の表現形式が象徴主義であることは當然である。

日本に於ける土の連續と人の連續との合一は、時間的には、土の上に連續展開的な歴史が堆積せることに外ならない。日本の國民社會は國土に於て時間的にも確立せられてゐる。かゝる所に於ては必然に國民的・超個人的統一生命の立場が強調せられる。このことは何よりも日本の倫理の特質である。日本人の重んずるのは、例へば印度に於けるが如き輪廻の非現實的の三世ではなくして、祖先より吾等を経て子孫に及ぶ現實的三世である。超個人的、歴史的生命の連續である。特に國土國家の永遠の生命である。この生命の立場の強調が日本倫理の根本性格であることは、今特に説明を要しないであらう。

右の情的竝に意的文化に對して、日本の知的文化に就いては、問題がやゝ複雑である。科學は日本に於ては主として輸入文化である。日本には體系的な思想が少ない。これらのことが、日本人の知性に關する輕侮的見解を生んでゐる。體系的な思惟は精神の統一性即ち個人性の確立と不可分であると云ふ見解より、それは日本人の個性の不發達としても表現せられて居る。太陽は東洋に昇るが自覺の内的太陽は西洋に昇ると云つたヘーゲル(註六)や、地球を北に進むに

つれ人類の皮膚の色が白くなる如く、地球を東に進むに従ひ人の個性はうすくなり、極東に位する日本人は最も個性が不明確であると云つたローウエルの言葉などはその例である。^(註七)この理論的構想の主體としての人格が日本に於ては不確立であると云ふ觀察は、その生活、文化に於ける無統一性——所謂二重文化の觀察と結合して、動かし得ない眞實であるかの如く考へられてゐる。かゝる見解の根本には多くの獨斷が含まれてゐる。例へば日本が科學の輸入をしたと云ふことを直ちに民族の知的優劣に關係づける如き、歐羅巴「諸」民族を母體として發展した科學の水準に對し、封鎖的な國家であつた日本の夫れを直ちに對比する如き、また近代の合理主義を以つて暗黙の中に知的文化の基準とする如きがそれである。また其處には短い歴史の一齣によつて民族性格の全般を推す危険もおかされてゐる。

此處に重要な問題は、次のことに存すると思ふ。それは、ゲマインシャフト的な生活形態は個性非強調の意味に於て知的發展に對する消極的な條件であると云ふ觀察と、全く自由なる個人を出發點とした知的文化は健康な知的文化であり得ないと云ふ思想とが、如何に調和され得るかと云ふことである。例へばウィットは「日本」に於て専らこの前者の觀點より日本人の知性を批判してゐる。^(註八)日本人は逆に後者の點より西洋文化を批判してゐる。しかし、この問題

は國民社會の本質より考ふる者のみ處理し得ると私は考へてゐる。國民とは、その重要な契機として、價値のあらゆる種類に應ずる文化を包有する、謂はゞ文化の自足的な範圍であると云ふ性格をもつ所の社會であり、しかも責任的行動の主體である。従つて文化を、従つて個性を、必至としない國民はあり得ないのである。國民と云ふゲマインシャフトは、決して知性や文化に對する消極的な存在では無いのみならず、かゝる全體性への聯關を失つたならば、知的文化はその生命力の根源と責任意識と道徳性への聯關を失ふのである。であるから知的自由主義も國民統一の前には頭を屈しななければならないのである。國民的統一生命の強調は、たゞ不健康な文化に對してのみ敵である。

然らば事實に於て日本の知的文化は如何にあるか。この問題は矢張國土日本より考へなければならぬ。

日本に於ける國と土——國社會と國土との統一——は支那に於ける家と天に對比することが出来るであらう。支那民族は古來明確なる國土意識をもたない。それは大陸に國して、土地に限界なく、その邊境に於ては異民族と錯綜してゐたからである。支那は自らを中夏と呼んだ。これは四荒に對する尊大な名であるが、然し中と云ふ言葉は明確に限界づけられた國土を有し得ない事情に調和してゐる。中は四方に對して文化を光被せしめ、自己の正朔を奉ぜしめる可能性とは調和するが、他面その國境を確保し得ない事情とも調和してゐる。これは正に支那の國家の現實であつて、この中國はかつて明確なる境域を保證したこと殆んどなく、然もその文化の浸潤力は驚くべく遠くに及んでゐる。明確なる國土を有し得ない所では、國家統一は困難とならざるを得ない。國家統一が困難であるならば、精神的權威の根元を國家に求めることも従つて困難であるは、云ふを俟たない。そこで支那民族は權威の根元を天に求め、天を倫理化したのである。また國家の統一性の薄弱は、相對的に血縁集團の重量を高めしめ、孝を絕對化する倫理を強調せしめた。支那の倫理の背景には、血縁集團の結束力に基づく社會的拘束力が存する。而して強い倫理意識は、主觀的・パトスのなるものに對する抑壓の意味に於て、合理主義の傳統を生んだ。マックス・ウェーバーによれば、この合理主義は正に近代歐羅巴の合理主義文化と對照をなす。支那の合理主義は、本來家族的集團と云ふ直觀性に富む全體に結合して成長した合理主義であるから、西洋の合理主義の如く抽象的觀念を樞軸としてゐない。それが科學にまで成長しなかつたのは當然であつて、たゞ倫理的合理主義として、人間の形成に貢獻したに止まるのである。

他方日本に於ては、國と土が合一し、従つて國民的統一が無比の強固さを得てゐることをその特徴としてゐる。此處では夙に氏族團體は國家に吸收せられ、家はあくまでも國民的統一に於て、その存立を保證せられてゐる。そこで

支那の孝に對して、忠が日本の中心徳目となつた。忠は中の心であると云ふ。それは人間本質のゲマインシャフト性を顯現する所以に外ならない。人々が自他一如となる所以に外ならない。忠は正にゲマインシャフトの原理であるが、同時にそれが君臣の間の原理として意識されてゐる所に、日本の國民社會の構造が明瞭に反映してゐると云ふべきである。

さて日本の精神傾向は、これを西洋の夫れに對比して、非主知主義的であると屢々云はれてゐる。認識に對する倫理の優位が指摘されてゐる。しかし倫理の優位と云ふことは精神の健康を意味する。のみならず、日本人の知性そのものも決して薄弱であると云へない。支那の合理主義に對して日本の主情主義が、徳用時代の國學者以來屢々云はれてゐるが、これは何等日本の知性の低度を告白するものではない。支那の合理主義は合理主義文化として傳統化し、個人のスピールラウムを局限して來たが、日本の主情主義は知性の澁滯しない活動力に結合してゐる。この故に日本の知性はよく大陸の思想を消化し、更に歐羅巴の思想を吸収し、哲學的思索に對する能力を示してゐる。これは一の驚異的事實である。人は屢々日本人の知性を輕んずるが、國內に於て同胞相戒め合ふ雰圍氣の議論としては兎も角、世界諸民族の文化力を大觀的に比較する立場に於ては、それは許されない。そしてかゝる知的可能性も亦日本の國民社會と結合せしめて考へられる。

一般に集團は大きくなるに従つて益々客觀的形象——象徴に依存する。象徴は無形なるもの、有形界への投影である。この意味に於ては、それは觀念的なるものに對する具體的なるものである。併し象徴を通して把へられる觀念的なるものは、複合的な現實態よりの抽象を意味する。この意味に於ては、象徴の發展は抽象の發展に外ならない。大なる集團は小なる集團に比して、抽象化と觀念化に依存することが、それだけ大きいのである。今、支那の合理主義

は家と云ふ直觀的全體に結合して、抽象的合理主義に達し得なかつた。日本人の純粹觀念と純粹理論への傾向は、支那の家に對して日本に於ては國家が確固たる存在として個々人の意識に現在してゐると云ふことに、結びつけて考へられなければならない。國家は家族に比して廣大な集團であり、複雑な運営の機構を有する組織體である。國家は從つて觀念的なるものに依存することが最も大きい。固より支那にも國家組織は存する。國家の技術的組織に就いて、彼は私の師でさえあつた。吾々は決して國家生活を特に日本的なものとするのではない。併し形式的な國家概念は今問題ではない。問題なのは國家の社會學的側面であり、團結性の狀態である。國家の民族生活に於ける現實的意義である。具體的に云へば、國家が國民の意識に常に現在せる形象であるか否かである。國民意識の缺乏が云はれてゐる支那に對して、日本民族に於ては、國民統一が強い程度に於て人々の意識に現在してゐる。このことは抽象的・觀念的な知性への精神の聯絡が濃厚であることを意味する。廣大・複雑なる政治的機構を有する國民社會を意識に現在せしめて思惟するとき、單なる直觀的集團としての家族を本位として思惟する場合に比して、知性はより多く觀念性への機會を與へられてゐると云ふべきであらう。私は此處に支那人の具體的思惟に對する日本人の純理的思惟の社會學的背景があると考へるのである。

思惟に對してかくの如き重要な關係をもつた日本の國民社會の統一性は、その國土との合一に依存してゐることは前記の通りである。しかし日本人の知性と國土との關係については、尙記すべきことがある。その第一は、日本の風土、就中その美しい景觀に基づく民族の審美的傾向と知性との關係である。清潔・均整等の感情は、審美心にも知的作用にも共通するものであるからである。第二は日本の國土の位置に規定されてゐる海外文化受容の仕方である。日本の異國文化受容の仕方は、國民が異國の大衆と直接に接觸することによるものではなくして、少數の人々の媒介

によつたものである。國民としては異國の文化をその社會より抽象して受容して來たのである。このことは異國の文化に對する純情な受容をなさしめ、時に盲目的模倣に陥らしめたが、しかもそれが日本人の觀念的對象性に對する感覺を培養したことは争へない。海外の思想に對する眞正面よりの受容は、もとより自國の傳統に對する不當な輕視となり、自己を空しくして異國に追隨すると云ふ卑屈なる精神を養ふ意味をもつてゐるが、これを制禦したものがまた國土的國民統一の立場であつたことも、最後にこれを擧げなければならない。(註九)

以上日本に於ける國と土の統一に基づく國民統一の強固さが、その文化に對して如何なる關係を有つてゐるかに就いて述べた。

三

國民社會と國土との統一は、近世に於て大いなる影響を受けてゐる。この問題は如何に觀察され、如何に處置さるべきであらうか。國土と國民との結合は、單に一定の國民が一定の國土内にあることを意味するのみならず、人々が一定の地點に於て國土に結合してゐることを意味するは云ふまでもない。そこで國土と國民の關係に於ける推移は、二面に於て考察されなければならない。第一は國民のその國土よりの分離、即ち國外への移住である。第二は國民の國土内移動である。近世の日本に於て、この二面の傾向は極めて顯著に起つてゐる。勿論この兩傾向は單に日本のみの現象ではないが、國土と國民の統一にその特徴を有してゐる日本にとりては、それは特別な考察の對象となるべき事柄である。

近世の交通機關の發達と新交通路の發見により、世界の諸國民は相接近せしめられ、而して日本もかゝる世界史的

動向の圏外に立ち得ず、遂にその鎖國政策に終止符を打つたが、これは、今換言すれば、國土の島國的隔離性が減退したと云ふにひとしい。かくて日本と西洋諸國との交通と云ふ全く新しい現象が起つたが、日本と亞細亞大陸との交通も急激に頻繁となり、季節風の自然的支配の下に於ける通航の時代と面目を一新した。ここに大陸と日本との運命的な聯關の意識が覺醒せしめられ、政治的、軍事的活動を伴つて、國民の大規模な大陸進出となつたのであるが、特に最近の滿洲事變及び支那事變はこれに一轉期を劃し、民族の大陸移動が云はれる程、國土外國民の量が巨大化しつつある。而して國家の生命線、生活圏、東亞協同體、大東亞共榮圈等の思想がつきつきに説かれてゐる。かゝる對外的發展に於ける理念は、すでに建國とともに確立して居り、また日本の東洋に於ける指導的地位は種々の見地より立證され得るのであるが、それがより明確なるプログラムにより、實力に支持せられて、實現が必至とされてゐる所に今日の意味がある。たゞ國土と國民社會の獨特な統一としての日本にとり、このことは如何なる現實的意味を有するであらうか。

國土外國民の巨大化、即ち外地居留者の増加は今日の日本の大きな特質であるが、外地居留者とは社會學的に如何なる性格のものであらうか。ジムメルは曾て「外來者の社會學」なる一文に於て、外來者を距離と接近との辨證法的統一と規定したが、外地居留者に就いても同様な兩面的考察が出来る。即ち外地居留者は開放と拘束との二面をもつてゐる。外地居留は先づ内地よりの空間的疎隔である。空間的疎隔は他の事情にして一ならば精神的隔離を意味する。居留は更に異民族の介在によるコミュニケーションの精神的稀薄性にもとづく所の解放を意味するとも云へるであらう。かやうな固有の道德的・精神的環境よりの距離は、人々をして粗野な赤裸々な人間性への復歸を思はしめる如き行爲に赴かしめる傾向をもつ。このことに關する多くの實例は、すでに吾々のよく聞かされてゐる所である。

所謂拘束とは如何なる意味に於て生ずるものであらうか。それは第一に居留同胞の小社會性より生れる。外地居留が異民族の中に分散して行はれることは寧ろ例外で、多くは同胞相密集して生活する。またその生活の基礎たる業務や經營に於て、彼等は相互に聯關する所が深い。しかも彼等全體として異民族に對立し、これと自己とを差別してゐる。かゝる事情にある在外民に於て、社會意識の拘束が強いことは當然である。第二に外地に於ては個々人は異民族との差別に於て、即ち民族の Exemplar として認知されてゐる。個人が國家を代表する性格が強い。個人は何よりも先づ日本人であると云ふ意味に於て遇せられ、自らも常にこのことを意識せしめられる。このことが個人の意識に對して拘束的に作用することも云ふを俟たない。かくて、一言にして云ふならば、外地居留は、内地の精神的勞圍氣よりの解放を意味すると共に、國民的全體社會の表象により強く結合せしめられると云ふ面を有してゐる。

國土は正に國土として國民に對し國民統一の象徴となり、その不可分の契機となつてゐると共に、他方に於ては風土として、その國民の生活の様式と文化とを規定してゐることは無論である。居留は國民的背景の下になされても、風土的にはそれは固有の風土の規定の外に立つことである。従つて固有の生活様式は外地の風土に調和する爲に之を變革すべき必要も生ずる。この場合、現地の習俗が右の變革に方向を與へるのは自然の勢である。若しこのことが進むならば、やがて居留民は固有の生活様式を喪失して、現地のそれに同化すると云ふことも可能である。しかしこれは云ふまでもなく固有の國民意識を動搖せしめる危険をもつてゐる。生活様式は風土に基礎をもつと共に、社會的歸屬の標識であるからである。尙右のことは居留民が二世三世となる場合、或は現地に於ける雜婚に於て、特に甚だしくなるであらう。

併し右は勿論一の可能に過ぎず、現實には幾多の事情により、必ずしも一概に之を云ふことは出来ない。現地の生

活様式がその風土に調和してゐても、それは最善の様式であるとは固より云へない。現地人の風俗習慣を採用すべき絶對的必然性はないのである。何よりも居留民の背後に立つてゐる國民社會の生活力と文化力は、この間に於て重要な意義をもつ。他面より云へば、國民の海外發展は常に固有の國民統一の強力な支持あるときに於てのみ、眞に國民的發展の名に値する。今日の日本國民の進出について云へば、それは國民を主體として考へられた新秩序の達成の爲の發展であり、従つて吾々にとりては右の如き發展のみが眞の發展であると云はなければならぬ。かくて固有の國土を離れた在外人口の巨大化は、その發展力の基礎を常に内地に置かなければならないが、これと共に固有の國土と外地の環境との景觀に於ける等質化であるとか、外地の風土に適する限り固有の習俗を維持することの用意が要請せられる。また外地と國土との交通關係が緊密に維持さるべきことも云ふを俟たない。勿論固有の生活様式や習俗も外地發展に於ける經驗により批判せられ、改善されると云ふ一面も閑却出来ない。この兩方面より、國土と不可分なる國民統一の、固有の國土を超えての維持は可能となるであらう。

右の如く、日本の國土外國民の巨大化は國民の固有國土よりの分離でありながら、それが國民的全體社會の理念によつて導かれ、統制されてゐる所に、國土と國民統一の統一と云ふ日本社會の性格と調和し得るのであるが、第二の國土内の人口の移動性の増進も、亦二面的考察を必要とする。日本は維新と共に封建制度を徹去し、此處に人々の居住移動並に職業選擇が自由となつたが、これは急激な職業の分化によつて益々促進せられ、この爲に地縁的集團の意義が大に減退した。政治制度もまたこれを促進してゐる。舊來の村は大抵數箇合併せられて、新しい行政村となり、自然的な統一であつた舊村の團結は、部落意識の排除の名の下に破られ、隣保の政治的、經濟的機能が損がれて來た。かゝる事柄が土地に對する人間の結合状態に於ける大變革であることは云ふまでもない。殊に近隣的結合の弛緩せる

生活形態である都市の發達、都市人口の總人口の中に於て占める比率の急増を併せ考へなければならぬ。かくて全體に於て、國土に對する國民の結合は弛緩したと云はなければならぬ。然し乍ら他面に於て考ふべきことは、かゝる推移と共に、全體的國土に對する意識は寧ろ強化されたことである。封建時代に於ては、國民は地域的に分裂し、爲に郷土としての國土に對しては強く結合してゐても、全體的國土は鮮明に表象されてゐなかつたと云へるからである。更に一の動向が指摘せられる。それは自然村の意義を回顧し、又は五人組的隣保制度の復活を唱へる思想である。この聲はすでに可成りの沿革を有してゐるが、特に今次事變の發生以後、その社會的影響としての地縁團結の強調が著しくなつて來た。元來戰爭は人間の社會的結合關係に對する重要な影響因子であることは云ふまでもなく、これは現に吾々の目前に見てゐる通りである。第一に對外的緊張に比例して國民の同胞的親和・團結が促進されてゐる。第二に銃後奉仕の爲、集團行動の種類と頻度が非常に大となつてゐる。第三に諸種の利益的集團の意義が後退した。第四に生活の各方面に對する集團的統制が顯著となつて來た。そして、これらの中に於て、またこれらのことと結合して、就中注意を要するのが、地縁團結の強調と云ふことである。これは、地縁關係は元來最も洩れなく人々を包括するものであること、行政組織が地域と結合してゐると云ふこと、諸種の統制は技術上地域單位に行はるべきもの最も多いと云ふこと、防空上の必然、近隣の社會意識の拘束性の利用の爲等に基づくものである。併しかゝる地縁的關係の強化は、單に時局に即應する爲に要求せられるのみならず、また一の文化史的意義を有つてゐることは、特に注意を要する。即ち、近代社會の機能的分化とモビリティの高度化は、社會生活に於ける自然的紐帶の意義を減弱し、人間の本質契機たるゲマインシャフト的性格を萎靡せしめつゝあるが、地縁的連續の再強化はかかる傾向への抵抗を意味してゐると云へるのである。特に地人の結合と地縁的團結に於て特色をもつ日本社會に於ては、それは自己喪失

の防止に外ならない。尤も、現代の文化の條件に於て、地縁的なるものの意味する人間の謂はば健康性を回復する方策は、具體的事情によつて一律に之を云ふことは出来ない。ひとしく地縁的結合の強化であつても、これによつて期待せられる課題は多様である。何よりもかゝる結合への前提に不同がある。先づ、自然的景觀に即してゐる所の、そして居住の接近と云ふことの上に、その範圍をほどひとしくする諸種の社會的聯關が堆積してゐる農村と、これと全く事態を異にする都市とに於て、地縁關係の再強化の前提が大に異つてゐる。更に細かに云へば、後者に於ても、男性と女性、成人と小供、出勤人と在町人、借家人と家作持、或は一般市民と集合住宅の居住者との間等に於て、それは大に異つてゐる。他方物資の配給や防空上の必要に關しては、都市の方が農村に於ける以上に近隣の聯繫の前提を有してゐるとも云へる。要するに地縁的團結の再強化には、これによつて實現せんとする特殊的目的と、社會的道德的理想とが分けられる譯である。今問題は後者に關してであるが、これについても今は單に、國土と不可分な日本の國民社會の性格は、例へば今日の地縁關係の強調の如き、人の連續と人と地の連續とを要請せしめる、と云ふに止めなければならぬ。たゞ附言すべきことは、それは必ずしも封建的舊時代に於ける農村的社會結合様式をそのまま、今日に復活せしむべしといふことを意味しないと云ふことである。人が自己の生れた地域的小社會の中にその全生活を投入してゐた時代とは異つて、今日に於ては、國民的全體社會の表象が凡べての人々に明瞭活潑となつてゐる。小地域の社會意識に對して國民的大社會の自覺が、小さな郷土への愛に對して、郷土の連續的全體としての國土への愛がより明確となつてゐる。郷土的集團に對する責任感情にとどまらず、國家に對する責任感情の強化が要請せられてゐる。此處に國土體驗の國民統一に於ける重要性を生かし、地の連續に裏づけられてゐる人の連續の意義を覺醒せしめる新しい「社會」政策は規定されなければならない。たゞ國民的結合の構造と文化的條件の推移を無視して、單純に、

近隣の・直觀的團結に過大な任務を期待してはならないと思ふ。殊にそれは我國民性格の一面である山間小社會的性に機會を與へ、潤達にして創意的な心性の活躍を阻害する危險をも包有してゐるのである。

註

- (一) Theodor Geiger, Die Gruppe und die Kategorien Gemeinschaft und Gesellschaft (Archiv f. Sozialwissenschaft und Sozialp. 58—2).
- (二) 十七條憲法第十五に「同」と「制」の文字がある。
- (三) Max Scheler, Wesen u. Formen der Sympathie, 2. Aufl. 1927.
- (四) Okakura-Kakuzo, The Ideals of the East, 1907, p. 1.
- (五) 王陽明「大學問」。
- (六) Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte (Einteilung).
- (七) Lowell, The Soul of the Far East, 1896.
- (八) Witte, Japan zwischen zwei Kulturen, 1928.
- (九) 拙稿「文化交流の問題」(日本社會學會年報「社會學」七)。